

J.F.フリースにおける哲学的認識の位置づけ

太田 匡洋(京都大学)

本発表の目的は、ヤーコブ・フリードリヒ・フリース(Jakob Friedrich Fries, 1773-1843)における「哲学的認識」の位置づけを、『新理性批判(Neue Kritik der Vernunft)』(第一版:1807, 第二版:1828-1831)およびその関連著作を参照しつつ、明らかにすることである。

フリースは、19世紀に活躍したドイツの哲学者である。ラインホルトやフィヒテ、シェリング、ヘーゲルらに代表される、いわゆる「ドイツ観念論」と同時期の人物であり、特にシェリング・ヘーゲルらと同世代にあたる。当時の人間関係をうかがい知る手がかりの一例としては、ヘーゲルが『法の哲学』の序文において行った、フリースに対する激しい批判などが挙げられる。

フリースが当時において大きな影響力を有していたことは、同時代にアーペルトらを中心に形成された「フリース学派」の存在に加えて、後世におけるオットー・リープマン『カントとその垂流』(1865)、J.E.エルトマン『哲学史綱要』(1866)、エルンスト・カッシーラー『認識問題』(1920)などにおいて、フリースの説明と批判に紙幅が割かれていることにも見てとれる。それにもかかわらず、今日ではフリースの名前はほとんど忘れられていると言ってよいと思われる。その理由は、フリース自身の立場の独自性に加えて、その受容過程のうちに認められる。

フリースの立場の特徴は、カントの批判主義の徹底化を図ることで、人間の認識の有限性を強調した点にある。このような立場の現れの一つとして、「すべての人間の認識は感性的な知覚とともに始まる」ことへの着目が挙げられる。この観点からフリースは、いわゆる「超越論的認識」もまた経験的な認識であることを指摘したうえで、「カントが超越論的と呼んだこの教説は、内的な経験の学問としての経験的心理学に属する」と述べる。このように、フリースの立場は、経験主義的な性格を強くもつものであり、このことによって、同時代における狭義の「ドイツ観念論」に対して批判的な立場を形成している。

しかし、後にこのフリースの立場は、「ア・プリオリとア・ポステリオリの混同」、ひいては「超越論哲学の心理学化」として、批判の対象とされることとなる。その決定打となったのが、クーン・フィッシャーによる1862年の講演「イェーナにおける二つのカント学派」である。この中でフィッシャーは、フリースの主張の力点を、「理性批判の認識の対象はア・プリオリであるが、その認識それ自体は経験的である」と定式化したうえで、「ア・プリオリなものは、決してア・ポステリオリに認識されることはできない」として、フリースの主張を斥ける。そして、フィッシャーのこの批判を引き継ぐかたちで、新カント派のリープマンや、ヴィルヘルム・ヴァインデルバントは、フリースの立場を、「批判哲学」と「心理学」の混同の所産であるとして批判する。その結果、フリースの哲学は、「心理主義」という評価とともに、哲学史の表舞台から姿を消すこととなる。

しかし、このようなフリースに対する評価は、フリース自身の立場に即するならば、あくまでも一面的なものに留まる。実際、フリースが活躍していた当時には、フリースの立場は必ずしも「心理主義」として理解されていたわけではない。その一例として、同時代の哲学者であるショーペンハウアーは、フリースの『新理性批判』について読書ノートを残しているが、そこには「心理学」に関するキーワードは基本的に登場しない。それゆえ、フリースに

対する「心理主義」という評価自体、その妥当性を再検討する必要があると考えられる。

この「心理主義」という評価の契機となったフィッシャーの批判の力点は、「ア・プリオリな原理はア・ポステリオリに認識されるか」という点にあった。また、この問題をカッシーラーは別の角度から定式化して、「権利問題」と「事実問題」の区別の問題として特徴づけている。それでは、フリース自身は、哲学的原理の認識がもつ経験的な性格を認めたいうえで、いかにして哲学的原理のアプリオリテートを確保しようと考えていたのであろうか。

この問題に対するフリース側からの応答として、古くはレオナルド・ネルズンによる、また近年では速川治郎やフレデリック・バイザー、ヴォルフガング・ボンジーペンによる研究が挙げられる。彼らによる応答を形成する第一の論点として、バイザーやネルズン、ボンジーペンは、フリース自身の意図を強調している。彼らの指摘によれば、無自覚のうちに「心理学的認識」と「哲学的認識」の混同へと陥っていたのは、むしろ「ドイツ観念論」のほうなのであり、フリースの意図は、その混同を指摘するとともに、「哲学的認識」の射程を見極めることにあったとされる。

第二の論点として、ネルズンや速川は、「理性批判」と「形而上学」の区別を強調する。両者の指摘によれば、「形而上学」はア・プリオリに成立するが、その成立の可能性を問題とする「理性批判」は、経験的でありうる。この観点から、ヴァインデルバントによる批判は、両者の混同の産物であるとされる。

第三の論点として、ネルズンはフリースの最初期の論考「経験的心理学の形而上学への関係」(1798)に着目することで、「認識の対象」と「認識の内容」の区別という論点を提出している。フリースによれば、「超越論的批判の対象は、ア・プリオリな認識であるが、超越論的批判の内容は、せいぜい経験的な認識である」とされる。この一見明快な論点は、フリースの立場を支える着眼点のように見えるが、他方でフィッシャーの批判は、まさにこの論点の妥当性に向けられたものとして理解できる。

しかしフリースは、この1798年の論考以降、この論点を出さなくなる。本発表はこの点に着目することで、かつて「認識の内容」と「認識の対象」の区別によって担われていた論点が、『新理性批判』においては別の契機によって担われるにいたったと考える。このような観点からフリースの哲学を見返すならば、従来から指摘されてきた「形而上学」と「理性批判」のあいだの区別とは別に、「理性批判」そのものが、二つの契機を有していることが見てとられる。それは、「理性批判」を遂行する“手続き”と、それによって得られる「哲学的認識」とのあいだの区別である。

フリースによれば、「哲学する技法」、すなわち「理性批判」の方法は、「分析(Zergliederung)」である。この「分析」という“手続き”そのものは、フリースが指摘するように、経験的であらざるをえない。これに対して、「分析」によって発見されるべき「哲学的認識」は、認識能力としての「理性」のうちにあらかじめ存するものとされ、それゆえに「必然性」を有するとされている。そして、「認識能力」の観点からは、この「分析」という“手続き”の担い手が「悟性」に、「哲学的認識」の担い手が「理性」へと割り振られ、さらに「思考行程(Gedankenlauf)」の観点からは、「論理的思考行程」と「合記憶的思考行程(gedächtnismäßiger Gedankenlauf)」の区別が強調されることで、両者の徹底化が図られていると考えられる。そして、フリースが「自己観察」や「内的知覚」、「心理学」というキーワードによって問題にしているのは、むしろ前者の“手続き”に関わる側面なのである。